

個が生きる作文指導

コース選択学習を取り入れた構成表作成指導を通して

檀上 健二

1. 研究の視点

児童は、いろんな個人差を持っている。学習の仕方においても直感的なひらめきを大切にすることもあれば、じっくり考えて論理的に学習に取り組む者もいて、その学習ぶりは、多様である。現代は高度情報化社会と呼ばれ、その進歩には、目を見張るものがある。この社会の変化に主体的に対応して生きる人間に要求されるものを、河野重男氏は、「自分にとって必要なときに、自分に一番ふさわしい方法で学習する能力である。そのためには、自分にふさわしい学習の仕方を児童自らが見つけだし、伸ばしていくことが大事だ。」と述べている。

ところが、現場の実践に目を移してみると相変わらず、一本の路線で目的地に向かうように教師の準備した単一の方法による学習が一斉指導の中で行われている。これでは、自分にふさわしい学習の仕方を見つけ出し伸ばしていくことはできない。目的地に向かうためには、多様な路線があるように、個の実態に応じた多様な学習方法が用意されなければならない。

そこで、本研究では、作文指導に焦点をあて、一人ひとりが自分にあった方法を見つけ伸ばしていく作文指導のあるべき姿を究明してみたい。作文という活動は、本来個の学習である。しかし、全てを個の学習に任せたのでは、いつまでも同じレベルにとどまり学習の効果が現れない。そこで指導の効果をあげ、しかも個の実態にそった学習を成立させるにはどうすればよいのかの両面から本研究を進めていきたい。

作文指導は、取材－構想－記述－推敲の一連の過程の中で指導されている。今回の研究では、特に、作文活動の中核となる構想の段階に視点をあて、構成表をどう作らせるかについて考えてみたい。なぜなら、構成表の作成は、思い出し、集材、選材、構成の一連の活動がなされなければならない作文活動の中核となる活動だからである。この活動の良し悪しが以後の記述の段階に多大な影響を及ぼすことになる。三、四年生の段階からこの学習活動に慣れて自分なりの方法を習得することは、以後の作文能力の発達を考えた場合、大変意義のあることである。ところが、これまでの構成表の作成は、教師の指導によって一つの学習方法が提示され、その方法によって児童は、構成表を作成していたように思う。これでは、その方法が自分に合っていた場合は、学習にスムーズに取り組むことができるかもしれないが、その方法に抵抗を感じる児童にとっては、以後の作文学習への意欲を欠くことになる。そこで、構成表を作る際に多様な方法を教師が提示し、その中から自分にあった学習方法を選択させて構成表を作らせる学習を考えてみた。

2. 研究の計画

(1) 研究仮説

作文の構成表を作成する段階に、多様な方法の中から自分にあった方法を選択させる活動を取り入れれば、児童は表現意欲を持って、豊かな作文を書くであろう。

(2) 具体的方策

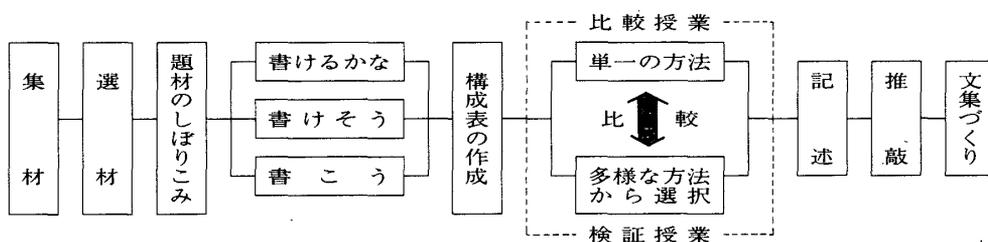
構成表の作成の段階に次の三方法の中から自分の学習スタイルにあった方法を選択して構成表を作成させる。

- ①書きたいことの項目を思いつくまま書き出させ、その中から必要なことを選択して項目立てる方法。(以下、項目設定法と呼ぶ 資料1 p18参照)
- ②書きたい場面を思い出し、簡単な絵に表現させる。そして、その前後の場面をさらに絵で表現させ、三つの場面を設定する方法。(以下 イラスト場面法と呼ぶ 資料2 p18参照)
- ③書きたいことの思い出しをカードを通して行い、そのカードを動かして場面を構成する方法。(以下 カード法と呼ぶ 資料3 p18参照)

(3) 検証の計画

- ①検証学級 広島大学附属東雲小学校複式中学年3年生9名 4年生10名 計19名
- ②検証方法 同一児童を対象として検証授業を行い、単一の方法で構成表を作成して作文活動に取り組ませた場合と、選択活動を取り入れて構成表を作成させて作文活動に取り組ませた場合とをベースライン方式によって比較し、その有効性を究明する。
- ③指導の流れ

選択させる活動を取り入れるため次のような指導過程を組み一斉授業の中に取り入れる。



④比較の観点

書き上げた作文が豊かなものとなっているか次の三つの視点7項目からとらえることにする。

- 作文の豊かさ
 - 基礎的的作文技能……文字表記数
 - 基本的的作文技能……文章の構成，段落意識，まとめり・中心
 - 物の見方とらえかた…心情面，比喩，擬態・擬声語，会話文の表記

それぞれの項目を3段階に分けて分析し、21点満点で数的処理をする。なお、この数的処理の仕方については、*神鳥・田原氏の論文を参考にした。観点別評価基準の作成に当たっては、客観的に診断するため、文章中において使用された表現の出現数に着目する。これは、主観を入れることなく客観的に作文を分析できる方法をとったからである。評価基準は、表1の通りである。

児童の情意面については、授業実施後の意識調査や感想文から選択学習を取り入れることについての意識をさぐり、その有効性を考察する。

3. 検証授業

4月より順次授業計画に従って比較授業を実施した。授業は、第1期・第2期に分けて実施した。2期に分けて実施するのは、より正確なデータを得るためである。指導の経過と構成表の作成方法は、次の通りである。

(1) 比較授業の計画と実施

表1. 分析・評価基準

項目	基準	A (3点)	B (2点)	C (1点)
(ア) 字数		800字以上	401~799字	400字以下
(イ) 主題		中心がはっきりしている。	中心はあるがもう工夫ほしい。	羅列でおわり中心が明らかでない。
(ウ) 段落意識		はじめ・終わりがはっきりしている。	段落の意識はあるがはっきりしない。	段落がなくだらだらとしている。
(エ) 比喩表現		文中で適切に使われている。3か所以上	使おうとしている。1~2か所	使っていない。0
(オ) 擬声・擬態語		3か所以上	1~2か所	0
(カ) 心情表現		3か所以上	1~2か所	0
(キ) 会話文		生き生きとした会話である。4か所以上	使っているが形式的である。1~3か所	0

*取材指導とその評価 広大学校教育学部紀要1985年

第1期検証授業				第2期検証授業			
月日	4月28日	5月9日	5月26日	6月10日	1月19日	1月26日	1月27日
題材名	①生活文 「くり谷小学校友だちへ」	②生活文 「ゴールデンウィークのこと」	③生活文 「身の回りの中から」	④生活文 「できごとと自分」	⑤変身作文 「ドッジボールになって」	⑥変身作文 「家庭学習のようす」	⑦変身作文 「変身日記を書こう」
方法	項目設定法	カード法	イラスト場面法	※三方法の中から選択	項目設定法	※三方法の中から選択	構成表なし

(2) 第1期検証授業の概略

第1期の検証授業は、生活文に文種をしばり、身の回りの中から題材を選んで書かせることにした。特に、ここでは、4月からそれぞれの構成表の作成方法について順次指導し、その作成法に慣れさせるようにした。そして、三方法から選択させて学習に取り組ませるようにした。選択学習を取り入れた構成表作成の場面の授業第三次1時分の概略を紹介する。

- ① 単元名 できごとと自分
- ② 指導計画



③ 本時の目標

取材した題材の中から書きたい題材を選び、自分に合った簡単な構成表を作ることができるようにさせる。

④ 指導の概略

ア 取材カードの中から書きたい題材を選ぶ。

児童は、本時の授業までに終わりの会などを使ってその日の出来事の中から心に残った事を材料貯金としてカードに残してきた。それを机の上にならべることから入った。どの子も20枚程度を集めていた。その中から次のように三段階の過程をとって題材の絞り込みを行った。

- ・「これなら書けそうだなあ」と思うことを5枚選ぶ。
- ・続いて「これなら書けるぞ」と思うことを5枚の中から3つ選ぶ。
- ・最後にその3枚の中から「これを書こう」というものを1つ選ぶ。

そして、そのことを誰に伝えたいか相手意識を持たせた。

イ 自分の書きたいことを自分に合った方法を取り入れて思い出す。

前述した三つの方法を提示し、簡単な説明をしてそれぞれが思いだしの活動に入った。思い出しにあたっては、五感をつかって思い出させるようにさせた。その時の指示は、次の通りである。

- ・項目設定法 「思いだしたことをどんどん“〇〇のこと”と書き出そう。」
- ・イラスト場面法 「一番よく覚えていることをまん中の枠の中に簡単な絵で描こう。絵では表せない聞こえた音や心の中で思ったことなどは、言葉で書き加えておこう。」
- ・カード法 「その時のことで覚えていることをカードに書こう。一枚のカードに一つのことを書くようにしよう。」

ウ 文章の構成をまとめる。

今回の場合、項目設定法を選択した児童はいなかったので次の二方法となった。そこで次のような方法で構成表の作成に入った。

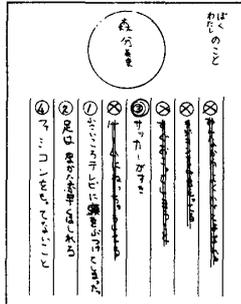
- ・イラスト場面法 中心場面の前後を同じようにイラストで表す。その時の会話などは、吹き出しで、心情表現は、ハートの中に記入する。
- ・カード法 カードの中から必要なものと不必要なものとを分ける。そして、必要なものの中から場面毎に中心になるカードとそれに関連したカードを選択し、はじめ・なか・おわりの構成表に貼りつける。

指導者は、座席指導案を基に机間巡視を行い作成に抵抗を感じている児童の個別指導を行った。終わったものには、どこを中心として書くのか、また、五感を働かせた構成表になっているかの確認をさせた。

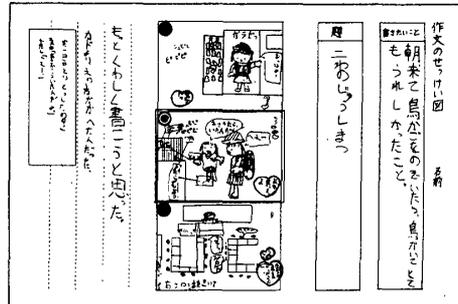
⑥ 指導の結果

児童の作成した構成表は、資料2・3のようになった。全員が一時間間に構成表を作成することができた。なお、児童の書いた作文は、紙幅の関係で紹介できなかった。

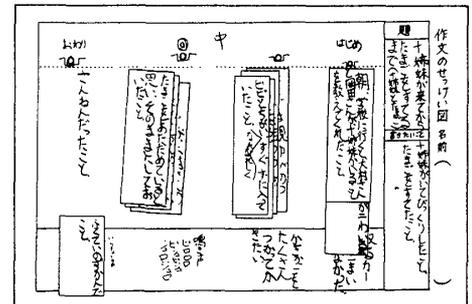
資料1. 項目設定法



資料2. イラスト場面法(11名)



資料3. カード法(8名)



(3) 第2期検証授業の概略

第1回の検証授業後、そのデータをより確実なものとするため、第2回目の検証授業を3学期に実施した。文種は前回と同じく生活文ではあるが、「変身作文」と名づけ視点を変えた表現に取り組ませた。書かせ方が違って同じような結果が出るか調べるためである。授業の流れは、前回と同じであるが、第1期のように、それぞれの構成法で一通り書かせることは時間的に無理であったので、項目設定法、三方法の中から選択、構成表を作らずに書くの三回に分けて作文を書かせ、できた作文を比較することにした。

① ドッジボールになって、親子ドッジボール大会のことを書く 比較授業⑤

第1回目の変身作文は、学級参観日に実施した親子ドッジボール大会のことを3時間扱いで、その時使われたボールになって書かせた。全員で共通の題材に取り組ませたのは、思いだしを容易にし、指導の効率をあげるためである。児童は、視点を変えて書くことが新鮮だったためか大変興味を持って取り組みこの学習に意欲的に取り組んだ。変身作文について5段階でおもしろさを評価させたところ平均得点が3年生4.6・4年生4.1という結果が出たことからわかる。

② 自分の好きなものになって家庭学習の時の生活の様子を知らせよう 検証授業⑥

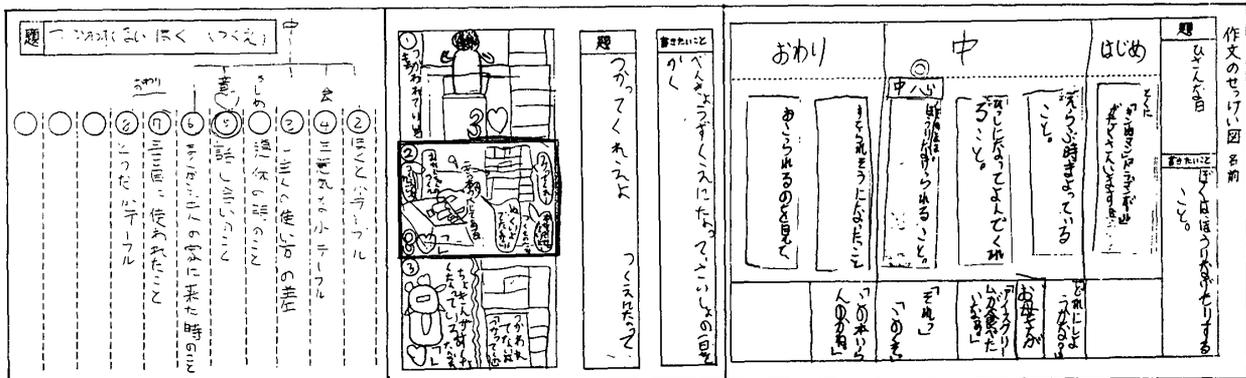
本校では、新一年生の入学調査のため一月に三日間家庭で学習することになっている。そこで、家庭学習後登校してきた日に、「三日間の生活ぶりを自分の好きなものになって先生に知らせてほしい」と意欲づけ第2回目の変身作文に取り組ませた。指導時間については、第1回目と同じように3時間扱いとし特別なことのないかぎり助言は行わなかった。構成表の作成にあたっては今までと同じように三方法を提示し、その中から自分にあった方法で作文の設計図(構成表)を作るよう指示した。どの児童も意欲を持って取り組み、時間内に構成表を作成し次の時間に記述することを

楽しみにしていた。指導後、児童が作成した構成表の例とその人数を紹介する。

項目設定法(9名)

イラスト場面法(2名)

カード法(8名)



③ 変身日記 比較授業⑦

第2期では、選択学習後、何も条件をつけずに変身作文の定着状況を調査するため変身日記を書かせた。ここでは、その日の出来事の中から心に残っていることを構成表を作らずに日記という形で記述させ、その結果を検証授業と比較することにした。

4. 結果の分析と考察

表2は、児童が書き上げた7回の作文を3段階、21点満点で数的処理をした結果である。

(1) 得点の推移

図2は、第1期、第2期の作文をそれぞれ分析の視点により数的

処理し学年別の平均得点を求めたものである。単一の方法で構成表を作成した場合と比べて選択を取り入れた時の作文の数値が向上していることがわかる。

表2. 各作文の得点一覧表

作文 児童	検証							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
3 年	ア	13	11	9	15	12	17	13
	イ	8	10	10	14	10	17	13
	ウ	10	14	14	19	16	18	13
	エ	10	14	10	13	10	14	10
	オ	9	19	11	16	欠	18	18
	カ	10	9	欠	16	19	18	11
	キ	12	17	18	18	16	20	19
4 年	ク	11	11	10	16	12	18	15
	ケ	10	15	14	14	17	18	10
	コ	11	13	17	18	11	16	11
	サ	8	17	12	16	16	19	12
	シ	11	16	14	16	15	20	10
	ス	11	15	14	16	14	17	18
	セ	11	15	14	18	15	21	19
	ソ	11	15	16	17	17	20	21
	タ	10	12	11	16	13	15	11
平均	チ	10	13	14	18	17	17	16
	ツ	11	16	16	20	19	19	16
	テ	11	15	17	16	17	19	16
平均	3年	10.4	13.3	12.0	15.6	14.0	17.5	13.5
	4年	10.5	14.7	14.5	17.1	15.4	18.3	15.0

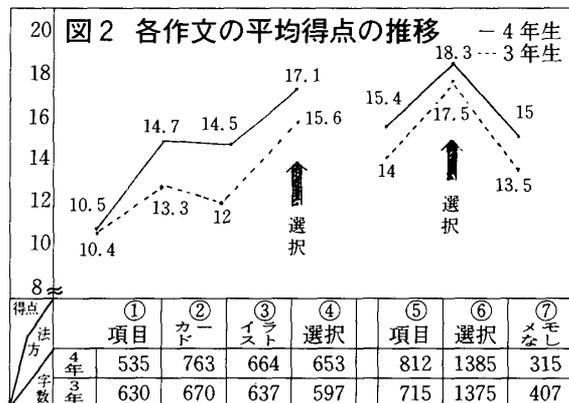


表3. 書き表し方の工夫 -各作文の総出現数-

方法 項目	第1期			第2期			
	①単一 (項目)	②単一 (カード)	③単一 (イラスト)	④ 選択	⑤ 単一	⑥ 選択	⑦ なし
(ア)比喩	0	2	2	25	6	14	1
(イ)擬態語	2	23	13	39	43	73	23
(ウ)心情	8	32	21	43	28	58	19
(エ)会話	4	68	55	80	35	179	18

また、書いた文字数についても調査したところ変身作文では選択学習後、高い伸びを示していた。表3は、豊かさの基準とした、比喩表現、擬声擬態語、心情表現、会話文の使用状況について調べたものである。どの項目においても選択学習の作文は、単一方法の学習と比べてこの出現数が多く

なっている。特に、会話文、擬声擬態語の使用状況が増えていることがわかる。

(2) 学習後の意識調査より

この選択を取り入れた学習と単一の学習で構成表を作る学習を児童がどうとらえているかを第2期の検証授業後アンケート調査した結果が表4である。単一の方法で構成表を作成した場合と選択する活動を取り入れた学習とでは、はっきりとした意識の差が見られた。つまり、3年生の「もう一度やってみたいか」の設問以外は、どの項目も選択学習で構成表を作成したほうがプラスイメージを持って受け入れられている。4年生においては、どの項目からも単一の方法による指導には、抵抗を感じているようすがうかがえる。これは、単一の方法で学習するという受身の学習より、児童がなんとかして自分のスタイルにあった学習方法を見つけ出そうとしていることの表れと考えられる。

表4. 意識調査の結果

	学年	単一の方法	選択
①このくみ立て法はやりやすいですか。	3	4.4	4.6
	4	3.5	4.8
②もう一度やってみたいですか。	3	4.6	※4.4
	4	4.0	4.7
③はやく書いてみたいと思いましたか。	3	4.6	4.6
	4	4.4	4.9
④せっけい図は役に立ちましたか。	3	4.6	4.8
	4	4.4	4.6

(3) 児童の感想文より

この選択して構成表を作る学習についての児童の代表的な声を紹介してみたい。

・ぼくは、おもいついたことをどんどん書いて、あとでけすことができるのでこの方法をとりました。それに、この方法は、はやくできるからべんりです。 (3年 イラスト法)

・カードだと思いついたことをぱっぱと書け、動かしてまとめていけるからやりやすいと思った。やりやすかった。この方法を通して自分に合った方法が分かった。 (4年 カード法)

・ぼくは、絵でかく方法でしました。分かりやすいと思ってかいてみました。でも、結果はちょっと分かりにくかったです。それは、絵だと三つの場面にしなくてはならないからです。ぼくは、四つの段落だったのでカードの方法がよかったなと思っています。 (4年 イラスト法)

それぞれに自分にあった方法を取り入れて学習に取り組んでいる姿がわかる。特に、最後の児童は、自分の取り入れた方法が今回の場合は思い通りにならなかった反省から次の学習への見通しを立てている。自分にあった学習方法を獲得するために努力している姿が読み取れる。

5. まとめ

ひとつの目標にせまるための方法を多様な中から選択する活動を取り入れることで、個が生きる学習を組織することができるのではないかと考え、児童の学習スタイルにあった構成表を作らせることに取り組んだ。選択の活動を取り入れることで次のような結果が得られた。

(1) 選択する活動を取り入れて構成表を作成して作文活動に取り組ませた方が、単一の方法で作文を書いた場合と比較して、児童は、豊かな作文を書くことができた。

(2) 多様な中から選択をして構成表を作らせる学習は、児童の意識調査、学習後の感想文の結果から受け入れやすく支持されていることが分かった。

以上の二点から仮説の有効性が立証されたと判断した。

今回は、同一児童を対象としてベースライン方式で比較・検証授業を実施した。これまでの研究では、学級間、グループ間の比較実験授業を通して仮説の有効性を立証してきたが、この方法と比べ今回の方法は、同一の児童を対象とすることができるので、一人ひとりの変容に視点をあてて研究を進めることができた。今後は、さらにこの方式について研究を進め、授業評価の科学化にも目を向けていきたい。また、書き上げた作文の分析を通して、一人ひとりの課題を明らかにすることができたことは、今後の指導を考える上で非常に有意義であった。この結果をもとに、一人ひとりに応じた作文指導に取り組みたい。